

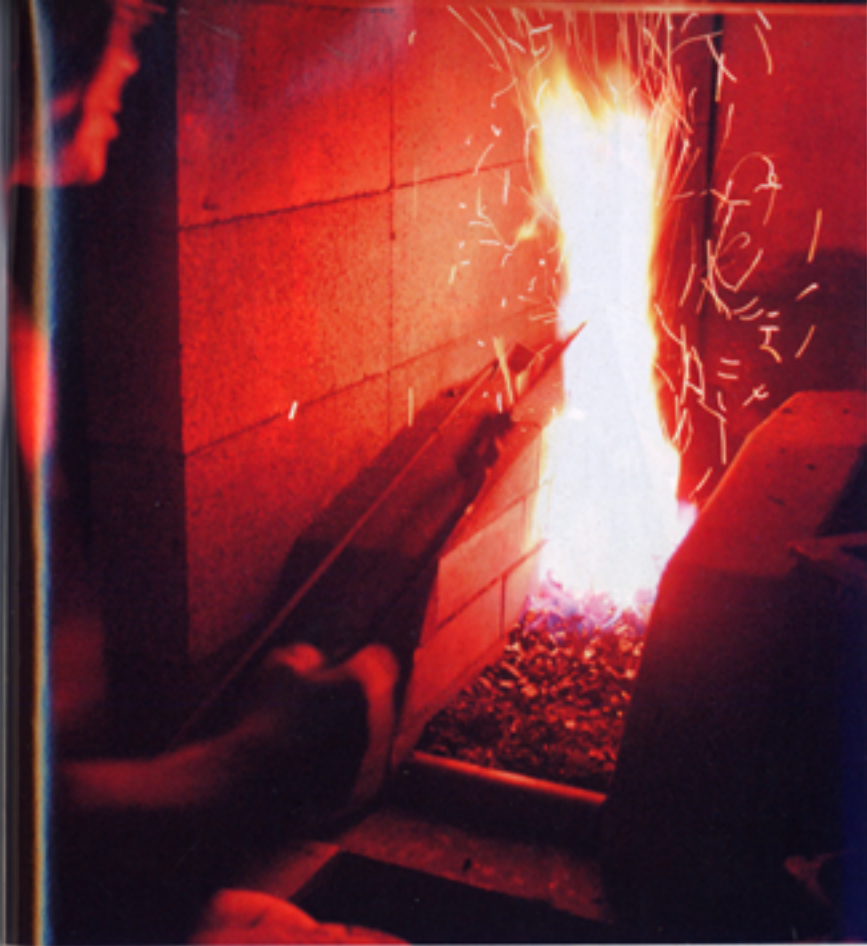


「ふい」を吹いて鋼材を熱し、的  
て鍛える。鍛冶場ならではの光  
景だが、この過程は今紹介し  
た初級編では扱われない。

刀鍛冶で魂に触れる

鉄の声を聞き 体温を感じ  
自分だけの「刀」を心に抱く

刀鍛冶体験のメインイベントである「焼き  
入れ」が「30分間の集中作業」である。この  
期間、刀は常に火の中にある。この間に  
刀の魂（まがは）が生まれていく。



上／灼熱の刀身を一気に水に入  
れる。刃文が作られるのと同  
時に「伏せ」が現れてまっすぐになる  
下／刃と反対側の背の部分（「棟」  
という）にやすりをかけて模様を  
つける。序盤の作業だ



初級編ではこの鋼の板から  
スタートする。刀の形は、71歳の

小学生数人に「鉄1」と綿  
1はどちらが重い？」となぞ  
なぞを出すと、必ず「鉄」と答  
える子もいる。

「鉄は硬くて重いもの」とい  
う先入観が幼い頃から人間  
の頭に刻み込まれている証拠  
である。だが、とかく常識と  
はもろいものだ。

測でできた刀身に鋼の刃の  
ような「鉄」と呼ばれる道具で  
削りかけると、にぶい音と  
ともに太陽光線を反射して  
キラキラと光る銀色の粉が舞  
い散る。鉄にも軟らかさがあ  
る——そう気づく瞬間だ。

ここは東京都内。異能なる



高野刀匠（左）の指導のもと、  
刀身に鉄をかける。この間に  
人を足取りたい人のために  
藍染めの着衣を用意してくる

刀の「押形」。押形とは江戸時代初め、写真やコピー  
がない時代に刀身を模写し、記録するために始め  
られた。銘の下手さが正確に写し取られている



サンデー毎日 押形  
制作 中原信夫(刀剣研究会講師、  
刀剣研究家)

**ブドウショップ**  
[住] 東京都豊島区池袋2-61-7  
[電] 03-3986-6221 [FAX] 03-3986-6222  
[営] 12:00~19:00(土日祝は18:00まで) [休] 水  
[備] 「小柄工房」は都内の高野刀匠の鍛冶  
場で実施(約7時間)。20歳以上であ  
れば1人から参加可能。材料費、実習、  
研ぎ、白鞘を入れて5万2500円。申し  
込み、問い合わせはファクスかメール  
(kazuaka@budoshop.co.jp)で

手がけた刀は研ぎを経た後、白鞘に収められて参加  
者に贈られる(所要期間約1カ月)。写真はサンプル

作風で知られる刀匠・高野宏  
行氏の工房で、「刀鍛冶体験」  
に挑戦できる。武士道の一端  
に触れるのに精神文化の象  
徴である「刀」は抜かせない。  
映画「武士の一分」でも主人公  
が「刀は武士の魂ださけ」と  
語るシーンがある。

「小柄工房」と称する体験で  
は作刀工程の一部を手がける。  
一部といっても刀身を削り上  
げて焼き入れる、いわば鋼の板  
を「日本刀」にするまでの「肝」  
を体験できるのだ。

高野刀匠とともに小柄工  
房を主宰する武道具店ブド  
ウショップの角田芳樹氏によ  
ると、「一流メーカーのエンジニア  
の参加者が多いという」。

「コンピューターによるモノ作  
りが主流ですが、鉄がどう縮



焼き入れの後、刃文を見極める高野刀匠。「し  
い刀には感動があるんですよ」と話す。刀鍛  
冶体験をきっかけに弟子入りした人も2人いる

むのかなどはやってみないと  
実感できない(角田氏)

高野刀匠は1952年生  
まれ。刀工銘行光。大学の金  
属工学科を中退して自衛隊  
に入り、退職後に修業の道に。  
「オレね、人を遊ばせる自信  
はあるんですよ」  
と口づけて笑う。職人は無愛  
想なもの、そんな「常識」もく  
つがえる貴重な二日だ。